２年２組　道徳学習指導案

授業者　濵津良輔

（２年２組教室）

１　主題名　お母さん　ありがとう

２　資料名　「きつねと　ぶどう」（「２年生のどうとく」ぶんけい）

（２－④　周りの人々の愛情に対し，感謝しようとする心情を育てる。）

３　授業構成

（１）教師と教材

人は自分一人では生きていくことができない，きわめて社会的な存在であると考えられる。他者との相互依存関係が基礎となって，人間の社会が成立し機能している。「してもらう」ことを他者に求めるだけでは，相互の信頼関係が崩壊するばかりではなく，自らの存在価値をも否定することにつながりかねない。他者に何かをしてもらうという受動的な側面だけではなく，自らも他者に積極的に関わっていこうとする能動性も私たちには必要であると考える。

ただ，人間の社会性を考える場合，他者への積極的な働きかけの必要性は社会的機能面のみで語られるものではない。他者や社会に自ら積極的に関わっていくことは，自らに大きな満足感と喜びをもたらすものである。人は他者とのかかわり合いの中で，社会の一員である自分すなわち「生かされている自分」に気づくとともに，自らが社会に必要な存在であると認識する。また，そうすることによって自分も他者もともにかけがえのない存在であることに気づき，他者に対する感謝の気持ちも育っていく。人と人とのより濃密な相互作用によって，人間社会はより豊かなものになっていくと考えられる。

本資料は，山の中に暮らしていたきつねの親子の話である。子ぎつねがおなかをすかせて泣くので，親きつねが遠い村までぶどうを探しに行く。ぶどうを手に入れて子ぎつねの所へ戻ろうとするが，猟師が子ぎつねを狙っているのに気づく。親ぎつねは自分の命も顧みず子ぎつねを助ける。やがて子ぎつねは成長し，ぶどうの木を見つけ，母ぎつねの深い愛情に気づく，という資料である。この資料を通して，子どもたちは，身の回りのさまざまな他者に支えられている自分を認識し，安堵感（安らぎ）や感謝の気持ちを育んでいくものと考えられる。

（２）子どもと教師

児童はこれまで，１年生との交流，附属養護学校との交流，「大学たんけん」，野菜づくりなどさまざまな体験を通して，他者との関係性に目覚め，集団の一員として資質を身につけてきた。しかし，この時期の児童は，自分を取り巻く人たちとの関係をとかく自分中心でとらえることが多く，周りの人たちがどのような気持ちや願いを持って自分に接してくれているかまでは十分に理解できてはいない。自分に向けられた周囲の人たちの思いをしっかりと受け止めることで，「生

かされている自分」に気づき，「ありがとう」という感謝の気持ちが育つものと考える。

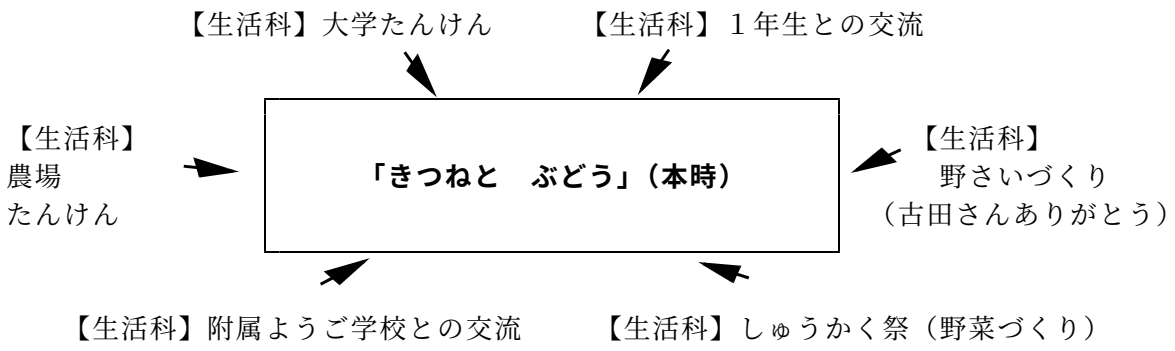
指導にあたっては，子ぎつねのために三つの山を越えてまでぶどうを取りに行く，親ぎつねの子を思う優しいの気持ちについて話し合う活動を通して，親子の絆の強さを感じ取らせたい。また，自分の命が危ないことも忘れて叫ぶ「コーン，あぶない。早くにげなさい。」という親ぎつねのことばに注目させ，親ぎつねの子ぎつねに対する深い愛情について考えさせたい。さらに，ぶどうの木を見つけてひとつぶ口に入れた時の「おかあさん　ありがとう。」ということばから，子ぎつねの親ぎつねに対する深い尊敬と感謝の気持ちを感じ取らせるとともに，自分を支えてくれる人々に尊敬と感謝の気持ちをもって接しようとする意欲を高めさせたい。

（３）子どもと教材

本時は，「きつねと　ぶどう」（坪田譲治の作品による）を資料として，家の人や身近な人へ感謝する気持ちの大切さについて考える。資料に登場する親ぎつねは，子どもたちにとっては自分の母親そのものであり，親ぎつねの子ぎつねに対する深い愛情は，子どもたち自身が共感的に受け入れていくものであると考えられる。病気をした時に看病してもらった経験，悩みごとについて相談にのってもらった時のことなど，家の人に世話をしてもらった経験を学習の導入段階で想起させ，学習の方向づけをしたい。また，あらかじめ，母親の願いや期待（「心のノート」に事前に書いてもらったもの）を児童に確認させておくことで，子どもたちの道徳の時間に向かう意欲を高めておきたい。

母親は子どもたちにとって極めて身近な存在であると言える。しかしそれゆえに，日常の生活場面においては尊敬や感謝の対象とはなりがたいものであるとも考えられる。きつねの親子のかかわり合いを通して，子どもたちは，これまでの様々な自己体験を想起し，意欲的に学習に取り組むものと期待している。

４　本時と関連する学習



5　本時について

（１）本時のねらい

子ぎつねを思う親ぎつねの気持ちを考えることを通して，身近で世話をしてくださる人々の愛情に気づき，感謝する気持ちを育てる。

（２）本時の活動から期待される児童の様相

A　自分の命を失ってもよいから子ぎつねを救いたいと思う親ぎつねの深い愛情に感謝する子ぎつねの心情に共感するとともに，自分の生活や具体的な経験と比較しながら，自分に愛情を注ぎ支えてくれている多くの人たちの存在に気づき，その人たちを尊敬し感謝して生活していこうとする意欲を持つことができる。

B　自分の命を失ってもよいから子ぎつねを救いたいと思う親ぎつねの深い愛情に感謝する子ぎつねの心情に共感するとともに，自分の生活や具体的な経験と比較しながら，自分に愛情を注ぎ支えてくれている多くの人たちの存在に気づくことができる。

C　自分の命を失ってもよいから子ぎつねを救いたいと思う親ぎつねの深い愛情に感謝する子ぎつねの心情を考えることを通して，自分に愛情を注ぎ支えてくれている多くの人たちの存在に気づくことができる。

（３）準備　お話の絵，ワークシート

（４）本時の展開

	学習活動	教師の支援・意図（〇）及び評価（※）
つかむ	1　日ごろ，家の人にどんな世話をしてもらっているかについて話し合う。 〇みんなは，家の人にどんなことをしてもらっていますか。 ・お母さんに食事を作ってもらっている。 ・おじいちゃんに本を買ってもらう。	〇家の人からいろいろな世話をしてもらっている自分に気づかせ，価値への方向づけをする。
	2　資料「きつねと　ぶどう」を読んで話し合う。 （１）親ぎつねは，どんな気持ちで遠くまでぶどうをとりに行ったのでしょう。 ・おなかがすいてかわいそう。 ・子ぎつねにおいしいぶどうを食べさせてやりたい。	〇おなかをすかせている子ぎつねにとってぶどうがどんなに美味しいものであるかを想像させながら，子ぎつねを思う親ぎつねの気持ちに深く共感させたい。

深 め る	（２）大急ぎで山へもどりながら，親ぎつねはどんなことを考えていたのでしょう。 ・子ぎつねはきっと大喜びするだろう。 ・事故もなく無事に待っているだろうか。	○残してきた子ぎつねのことを心配したり，ぶどうを前に喜ぶ子ぎつねの顔を想像したりする親ぎつねの気持ちを感じ取らせたい。
	（３）近くに猟師がいるのに，親ぎつねはどうして「コーン，あぶない。早く　にげなさい。」と叫んだのでしょう。 ・子ぎつねが撃たれたらどうしよう。 ・子ぎつねのためなら，自分はどうなっていもいい。	○自分はどうなってもよいから子ぎつねを救いたいと思う親ぎつねの気持ちを考えさせ，その思いの深さを感じ取らせたい。
	（４）「おかあさん　ありがとう。」と言った子ぎつねは，心の中でお母さんにどんなことを話しかけたのでしょう。 ・お母さんのおかげで，今こうして生きているよ。 ・お母さん，もう一度会いたいな。 ・お母さんありがとう。このぶどうはお母さんがあの時取ってきてくれたぶどうなんだね。	○親ぎつねの深い愛情に気づき，心から感謝する子ぎつねの心情に共感させたい。 （ワークシート） ※「おかあさん　ありがとう」という子ぎつねのことばを手がかりに，親ぎつねに心から感謝する子ぎつねの心情に共感できたか。
	３　今までの自分を振り返り，感謝の気持ちを持った経験について話し合う。 ○人の世話になって，心から「ありがとう」と思ったことはありませんか。 ・病気の時，お母さんが看病してくれた。 ・交通指導員さんが登下校の安全を見守ってくださっている。	○母親や身の回りの人たちから受けている善意や愛情に気づかせ，これまでの自分はどうだったか振り返らせると共に，周囲の人々に心から感謝する気持ちを持たせたい。
	【課　題】　親ぎつねの深い愛情に気づき感謝する子ぎつねの心情に共感するとともに，自分を振り返り，周囲の人々に心から感謝して生活しようという意欲を持つ。	
広 げ る	４　教師の説話を聞く。	○教師の話を聞き，たくさんの人に支えられて今の自分があるということを意識させ，授業を終わりたい。